

(様式6-3)

研修等 報告書

平成 30 年 1 月 12 日

三田市議会議長 今北 義明 様

私は、研修等報告書を下記のとおり提出します。

会 派 名	市民の会	代表者	美藤 和広	印
		議員名		印
参加者氏名				
講演会等研修名	TRC セミナー「まちの課題を解決する図書館 岐路に立つ図書館～3つの視点から進化の方向性を探る～」			
研修事項	1. 『今、ここからすべての場所へー図書館のクオリア』 茂木 健一郎(脳科学者) 2. 『図書館と自治体政策の再生』 宮脇 淳(北海道大学院教授) 3. 『図書館と言う「メディア」の可能性』 湯浅 俊彦(立命館大学教授)			
日 時	平成 2 9 年 1 1 月 7 日 (火曜日) ～ 平成 2 9 年 1 1 月 7 日 (火曜日)			
場 所	横浜市西区みなとみらい 1-1-1 パシフィコ横浜			
所 見	・ 別紙の通り			
添付資料	・ ・ 講演資料 ・			

6 添付書類 (講演会内容のパンフレット等)

交付対象議員は会派名、議員名を記入してください。(代表者名、参加者氏名は不要)

17-11-07 【第19回図書館総合展 図書館流通センター主催フォーラム】

フォーラム名： 岐路に立つ図書館

会場： 第2会場（アネックスホール202）

開催日時： 11月7日（火） 13:00～17:00

13:00～13:10 開会・主催者挨拶

13:10～14:20 茂木 健一郎(脳科学者)

14:35～15:35 宮脇 淳(北海道大学院教授)

15:45～16:55 湯浅 俊彦(立命館大学教授)

16:55～17:00 閉会

「地方創生」等の流れの中で、図書館にスポットの当たる機会が増えてきた。それとともに、図書館に求められるものも、より多様かつ高度なものとなりつつある。そうした社会からの要請や期待に応えながら、図書館が新たな進化を遂げていくには何が必要なのか、今回のセミナーでは、脳科学、行政学、情報学の3つの視点から、これからの図書館の「中身」のあり方を中心に、進化の方向を探る。

13:10～14:20 茂木 健一郎(脳科学者)

『今、ここからすべての場所へー図書館のクオリア』

今までの大学入試や大学の意味がムダになりつつある。

これからの教育は、アクティブラーニングで自ら探索し調べる、与えられるのではなく、自ら求めるべきだ。そのためにも、図書館は非常に重要な役目を持っている。

時間と空間を超えて、ネットワークの所産たる書物等を媒介に、様々なネットワークのつなぎ手となる図書館。「今、ここ」「脳が喜ぶ」などをキーワードになってくる。

AIやIoTなど大きく変革する現在を考え、ネットワークだけでなく実体として紙の媒体の意味の再認識と、市民の検索に応えられる図書館の必要性を痛感した。

14:35～15:35 宮脇 淳(北海道大学院教授)

『図書館と自治体政策の再生』

従来の政策展開が蓄積したリスクに加え、新たな環境がもたらすリスクにも対応する中で、日自治体政策をいかに再生していくか。1対1の、地域政策、行政経営等の視点が強く求められている図書館を例にした説明であった。

1、地域・自治体政策にとっての図書館

●自治体経営:行動規範の転換

1,980年代図書館は行政管理で、法令に従い、やってあげればよかった。

今、経営の視点で、限られた資源を有効に活用し持続性を持たなければいけない。

●パワーシフトと自治体経営の構図

超少子高齢化グローバル化に対し地域の構造変化や行政の構造変化、さらに地域型行政経営を実施体系として実現しなければいけない、そのため情報化が必要となってくる。

縦型ネットワークのメリット・デメリットを理解し、

社会システムとしての横型ネットワークでの連携が必要である。

●パワーシフト時代の地域の図書館機能として

- 1 ネットワークハブ機能
- 2 創造性を生み出す機能
- 3 公共性を生み出す機能
- 4 科学する機能
- 5 地域とのパートナーシップ機能

これらを合わせて図書館の進化が必要であり、日々少しでも変化・改革が必要である

2.民間化と図書館機能

●業務の多様化と民間化

行政完全提供に対し、

①民間への作業委託②民間への業務委託③民間への指定管理④ PFI⑤コンセッション等
以上が民間化、民間(企業等)完全提供を民営化と呼ぶ

●民間化の本来の目的は、

- 1 目的=民間との連携による公共サービスの効率化と進化の持続性確保
- 2 効率化=投入資源(労力・コスト等)と産出成果の改善
- 3 進化=公的領域の創意工夫
- 4 持続性確保=リスクマネジメントの充実

●リスク対応能力とは

- 1 事業目的の達成に影響与える阻害要因を認識・分析・評価し、適切な対応を行う力
- 2 具体的には事業を取り巻く阻害要因について適時的確に把握し回避するとともにリスクが顕在化した際に敏速な対策を選択する力。
- 3 適時的確な対応とは、事業に関係する所が好要因をコントロールするプロセスであるリスクマネジメントを確立する力。
- 4 「内部要因で発生するリスク」と「外部要因により発生するリスク」を区別し、両者のリスクの内容と発生源の洗い出し、両リスクをマネジメントする力。

●行政のリスク対応は、大きく3つの方法に分かれる

- 1 リスクを受け入れる受容
- 2 リスクを避けて通る回避
- 3 リスクの被害を低減

●指定管理に見るリスク課題例

- ①指定管理に関する行政側の実質的規範は総務省通知。
- ②法令的には契約自由の原則が優先。
- ③自治体により条例・コンプライアンスの質が大きく相違。
- ④企業会計・公会計・税務会計等の実務が不整合。
- ⑤不適切事例が先進事例として取り扱われる場合がある。
- ⑥請負的パートナーシップの性格が強い。
- ⑦行政と指定管理者との情報共有が希薄な場合がある。 等

●窓口業務相互下に見るリスク視点では

- ①総合窓口業務は、提携・専門性が低いと言えるか
- ②制度・運用変更が激しく、周知徹底に限界
- ③問い合わせ・相談業務と定型的業務の区分が困難。
- ④バックヤードとの連携に限界。

以上業務について情報の蓄積・伝達の視点から再整理することにより、まちひとしごと創生に置いて、図書館は、単なる複合化ではなく、ハブになる必要がある

三田も今まさに新たな市民活動のハブとしてのスタート地点であり、柔軟な視点とサポートが必要だと痛感した。

15:45～16:55 湯浅 俊彦(立命館大学教授)

『図書館と言う「メディア」の可能性』

情報化、多機能化、民間化なども含め図書館と言う技術が進展する中で図書館はどこを目指していくのか、その中身が根本から問われる今日、図書館と言う「メディア」のこれからのあり方を、電子書籍やIT機能を駆使した（たとえば自動読み上げ機能で視覚障害対応など）、大胆な提案であった。

実例として、三田市立図書館の視覚障害者に対する読み聞かせの仕組みを紹介していた。電子出版を活用した新たな図書館サービスの実践事例の一つとして、「障害者サービス例えば音声読み上げを活用した電子書籍サービスとして、2015年1月三田市の総合福祉保健センター読書アクセシビリティ実証実験で、残念ながら障害者には良い評価は得られなかったとのことだが、電子図書館ならではの、新しい可能性を感じた。

- 1、文化情報学の観点から見た図書館の変化
 - 1.1 電子出版と図書館
 - 1.2 デジタルアーカイブの構築と図書館の役割
- 2.電子出版を活用した新たな図書館サービスの実践事例
 - 2.1 障害者サービス
 - 2.2 多文化サービス
 - 2.3 児童サービス
- 3、ディスカバリー・サービスが変える図書館
 - 3.1 ウェブスケール・ディスカバリー・サービスの進展
 - 3.2 HRAF、電子図書館 Ariadne、ボックス、「長尾構想」
- 4、利用者の情報行動の変化とこれからの図書館
 - 4.1 検索の時代
 - 4.2 所有から利用へ
 - 4.3 人口減少時代の知識集約型図書館

かなり専門的な事例がたくさん出されたが、これからの社会教育の大きな転換点を感じた。電子図書には課題は多いが、視覚障害はじめ移動制約のある方々に提供できる仕組みも可能性があり、これからの注目点と考える。

以上

岐路に立つ図書館

=3つの視点から進化の方向を探る=

図書館流通センター・図書館総合研究所

【プログラム】

- 13:00-13:10 開会・主催者挨拶
- 13:10-14:20 今、ここからすべての場所へー図書館のクオリア
茂木健一郎（脳科学者）
- 14:25-15:35 図書館と自治体政策の再生
宮脇 淳（北海道大学大学院法学研究科教授）
- 15:40-16:50 図書館という「メディア」の可能性
湯浅俊彦（立命館大学大学院文学研究科教授）
- 17:00 閉会

【日時】 2017年11月7日(火)13:00-17:00

【会場】 パシフィコ横浜 アネックスホール202（横浜市西区みなとみらい1-1-1）

- 【資料】 1. 図書館と自治体政策の再生〈宮脇 淳〉 (P 4-)
2. 図書館という「メディア」の可能性〈湯浅俊彦〉 (P12-)

【Talking Points】

岐路に立つ図書館 =3つの視点から進化の方向を探る=

「地方創生」等の流れの中で、図書館にスポットの当たる機会が増えてきました。それとともに、図書館に求められるものも、より多様かつ高度なものとなりつつあります。そうした社会からの要請や期待に応えながら、図書館が新たな進化をとげていくには何が必要でしょうか。今回のセミナーでは、脳科学、行政学、情報学の3つの視点から、これからの図書館の「中身」のあり方を中心に、進化の方向を探ります。

第1講：『今、ここからすべての場所へー図書館のクオリア』 <茂木健一郎 脳科学者>
時間と空間を超えて、ネットワークの所産たる書物等を媒介に、さまざまなネットワークのつなぎ手となる図書館。「今、ここ」「脳が喜ぶ」等をキーワードに、これからの時代に求められる図書館の本質を探ります。

第2講：『図書館と自治体政策の再生』 <宮脇 淳 北海道大学大学院法学研究科教授>
従来の政策展開が蓄積したリスクに加え、新たな環境がもたらすリスクにも対応する中で、自治体政策をいかに再生していくか。自治体機能、地域政策、行政経営等の視点が強く求められている図書館を例に考えます。

第3講：『図書館という「メディア」の可能性』 <湯浅俊彦 立命館大学大学院文学研究科教授>
情報化、多機能化、民間化等も含め図書館という「技術」が進展する中で、図書館はどこをめざしていくのか。その「中身」が根本から問われる今日、図書館という「メディア」のこれからのあり方を大胆に提起します。

【講師プロフィール】

茂木健一郎 (もぎ・けんいちろう) 脳科学者、ソニーコンピュータサイエンス研究所上級研究員
東京大学理学部・法学部卒業、大学院理学系研究科修了。理学博士。理化学研究所、ケンブリッジ大学研究員を経て現職。「クオリア(感覚の持つ質感)」をキーワードに脳と心の関係を研究。作家、ブロードキャスター等としても幅広く活躍。著書に、『今、ここからすべての場所へ』(筑摩書房、第12回桑原武夫学芸賞)、『脳と妄想』(新潮社、第4回小林秀雄賞)、『脳を活かす勉強法』(PHP 研究所)等。

宮脇 淳 (みやわき・あつし) 北海道大学大学院法学研究科教授、同 公共政策大学院教授
参議院事務局、経済企画庁、(株)日本総合研究所主席研究員等を経て現職。内閣府地方分権改革推進委員会事務局長、総務省第3セクター等のあり方研究会座長、下水道財政のあり方研究会座長、文科省中央教育審議会専門委員等を歴任。著書に、『自治体経営リスクと政策再生』(東洋経済)、『政策思考力基礎講座』(ぎょうせい)、『創造的政策としての地方分権』(岩波書店)等。

湯浅俊彦 (ゆあさ・としひこ) 立命館大学文学部教授、同 大学院文学研究科教授
大阪市立大学大学院創造都市研究科修了、博士。夙川学院短期大学准教授等を経て現職。日本出版学会副会長、日本ペンクラブ言論表現委員会副委員長。著書に、『大学生が考えたこれからの出版と図書館』『デジタルが変える出版と図書館』(以上出版メディアパル)、『出版流通合理化構想の検証』『日本の出版流通における書誌情報・物流情報のデジタル化とその歴史的意義』(以上ポット出版)等。